

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：34311

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370970

研究課題名(和文)文化資源としての景観を巡るポリティックス

研究課題名(英文)Politics of landscape as cultural resource

研究代表者

大西 秀之(Onishi, Hideyuki)

同志社女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：60414033

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、地域コミュニティの意思決定に基づく景観の保護と利用の可能性を追究した。具体的には、北海道東部と奄美群島に暮らす地域住民を対象として聞き取り調査を行い、現地の文化的景観をめぐる多様な知識と認識を調査した。これに加えて、それぞれの調査地でワークショップを開催し、情報提供者をはじめとする地域住民の方々との意見交換を試みた。

これらの調査の結果、地域住民の景観価値を考慮した上で、その保全のためにそれらを利用することの重要性を提示した。とりわけ、こうした視座は、ユネスコ世界遺産に代表される既存の景観の普遍的価値に対する代替案となり、また同時にそれを補足するものなることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the possibilities of landscape conservation and utilization based on decision making in the local community. In particular, it examined the knowledge and perspective of various local residents concerned with cultural landscapes in eastern Hokkaido and the Amami islands by holding interviews with them. In addition to this, the researcher held workshops on each research area, and attempted dialogue with local residents including informants of this research.

As a result of these examinations, the importance of considering the landscape values of local people and utilizing those for the conservation of the landscape can be seen. Especially, this kind of perspective should become an alternative for existing universal values of landscape represented by the UNESCO world heritage designation, and simultaneously complement that.

研究分野：人類学

キーワード：景観 文化財 世界遺産 環境認識 史跡 国立公園 北海道 奄美群島

1. 研究開始当初の背景

景観 (Landscape) は、文化財保護や環境保全などの関連で、近年改めて注目を集めている概念である。たとえば、UNESCO (国際連合教育科学文化機関) の世界遺産登録では、文化遺産や自然遺産の区分にかかわらず、景観は重要な概念あるいは構成要素として位置づけられている。

このような状況に呼応するかたちで、アカデミズムの側でも、景観を対象とした研究が、自然科学から人文社会科学に至る、さまざまな研究領域で活発に行われている。また、欧州を中心として、独立した学際領域として景観研究 (Landscape Studies) が組織され、専門分野を異にする多様な研究者が参画し議論を交わしている。

こうした潮流と接合、交流しつつ、人類学でも、景観をテーマとした民族誌的調査・研究が展開されるようになってきた。もっとも、景観は、人類学にとって決して目新しい対象ではなく、現地の人びとの生活空間や社会実践として、従来から分析検討としてきた既知のテーマと見なすこともできる。だが、景観研究において、今日、人類学が主体的な役割を果たしているか、といえれば必ずしも肯定的な評価を下すことはできない。なぜなら、これまでの景観を対象とした人類学の議論は、基本的に自らの研究領域の内部にとどまるものであり、景観研究にかかわる他分野に影響を与えリードするような提案が十分になされていないからである。くわえて、これまでの人類学による景観研究は、少なからず象徴分析やポストモダニズム批判などに偏重しており、必ずしも民族誌研究に基づく人類学でなくとも提示できる議論となっている。

以上のような現状に対し、申請者は、景観をテーマとした複数のプロジェクトにかかわるなかで、民族誌調査に基づく人類学は、既存の景観研究が十分に明らかにしてこなかった、景観を構築、維持、再生産している現地の人びとの実践を直接的に分析・検討することができる数少ない研究領域である、との認識を強く抱くようになった。また、こうした人類学による実践の分析・検討は、アカデミズムとしての景観研究のみならず、実社会における景観の保全や活用にも重要な貢献を果たしうることを、これまで研究実践の社会的還元などを通して提示してきた。

2. 研究の目的

本研究では、UNESCO の世界遺産をはじめとする文化財行政のなかで、近年改めて注目を集めている文化資源としての景観を対象として、そこに関わる重層的なポリシーックスとしての政策や意思決定の検討を試みる。具体的には、UNESCO の世界遺産登録に関わる景観を調査対象として、その景観にかかわる地域社会の人びとの多様な実践を民族誌レベルで調査・分析する。

以上のような目的の下、本研究では、

UNESCO の世界自然遺産リストに既に登録されている知床半島と、将来の登録申請に向け「暫定リスト」に入った奄美大島の二地域を調査対象とする。具体的な計画としては、それぞれの地域の景観を構築、維持、再生産している当該社会における人びとの実践を、一般にトップダウンと認識される行政機関の業務、通常ボトムアップと認識される NPO や市民団体などの活動、それらのバックグラウンドとしての地域コミュニティの営み、という三つの側面・視点から多層的に分析検討する。

まず、行政機関を対象とした調査では、世界自然遺産 (あるいはその候補) としての景観の保護や活用に関して、地方自治体から国際機関までの多様なレベルの担当機関が、どのような目的や計画の下、いかなる組織や体制で、どんな取り組みを行っているか、その実務担当者の個人的な活動のレベルで検討を試みる。この調査では、各種行政機関の事務官をはじめとする、さまざまな活動やサービスが、多種多様な目的・計画、組織・体制、取り組みによって実践されている、数々のアクターの集積であることを明らかにする。またここでは、特に運営主体となる行政機関のレベルにかかわらず現地に設置されている、博物館などに代表されるレジデント型研究機関に所属する (公務員でもあり研究者でもある) 職員の業務を中心に・集中的に対象とする。

次に、NPO や市民団体を対象とした調査でも、基本的に行政機関の検討と同様に、どのような目的や計画の下、いかなる組織や体制でどんな取り組みを行っているか、その実務担当者の個人的な活動のレベルで検討を試みる。ただこの調査では、対象とする組織の背景を把握するため、その設立の経緯や運営資金の出所、あるいは可能であればメンバーのライフヒストリーなどの把握にも努める。なおこの調査では、環境保護団体やエコツーリズムなど目的や活動の異なる団体を対象とするなかから、ひとつの景観を巡る知識、価値観、眼差し、理想像などの違いを明らかにするとともに、それが各団体の活動や所属する個々人の実践にどう反映しているか読み解きを試みる。

最後に、地域コミュニティを対象とした調査では、世界遺産に登録された (あるいは候補となった) ことを率直にどう感じているか、またそれによって自身の日々の営みが変わったか、影響があったか、さらには行政の取り組みや市民団体などの活動をどう評価しているか、その活動に積極的にせよ消極的にせよ関与しているか、などの情報を収集する。なおこの調査でも、地域住民の語りのレベルだけではなく、環境保護や観光業にかかわるボランティア活動、講演会や勉強会などへの参加、日常生活の能動的・受動的変化、といった実践レベルでの把握に努める。このような検討によって、往々にして一枚岩として見

なされがちな地域コミュニティと景観との関わりを、なるべく個々人の住民の多様性な実践や語りとして捉える。

以上のような多層的な分析検討を通して、本研究では、それぞれの位相での実践に関与し促している、さまざまな政策や意思決定を追究する。そこでは、ある特定の法律や政策といった個別具体的な政策や意思決定はいうまでもなく、環境保護や文化財を巡るローカルからグローバルなレベルに渡る言説の読み解きを試みる。また、そうした読み解きの結果として、個人から組織・団体における言説の差異や、語りと実践のズレなどを明示化することが期待できる。くわえて、本研究の成果として、既存の環境保護・文化財行政の限界や課題を明らかにするなかから、民族誌的研究が果たしうる貢献についても提示する。

こうした検討を通して、本研究では、文化財としての景観が、現地の人びとのどのような実践によって維持され創出されているか、またそれらの実践を促している個人・コミュニティから国家・グローバルなレベルまでの権力関係・政治性を明らかにする。またそのような検討を踏まえ、最終的な目的として文化資源としての景観を保護・活用する上で、民族誌的研究が果たしうる役割や貢献を提起する。

3. 研究の方法

本研究では、参与観察と聞き取り調査の二つのアプローチによって、世界自然遺産とされる景観に対する現地の人びとの認識や関係性を明らかにするなかから、その背景に働いている環境保護や文化財行政などとしてのローカルからグローバルな政策や位置決定の解明を試みる。

まず参与観察では、行政機関、民間団体、地域住民に属する個々人の諸活動を対象として、そうした実践が行われる場所・空間、あるいは対象とする景観の諸要素の把握に努める。その上で、聞き取り調査によって、そうした各実践者が場所・空間や要素を選択した理由や背景を明らかにする。

上記のような計画に対して、基礎データ収集のための現地調査を奄美大島と知床半島の二地域で実施する。現地調査では、特に野外での活動を主要な対象とした参与観察と聞き取り調査を実施する。具体的には、各団体の諸個人が多様な活動を行った地点をマッピングするとともに、そこで対象とした景観の諸要素を記録した上で、個々の当事者に活動を行った目的や理由をインタビューする。この調査より、さまざまな実践者が活動によって訪問した場所や目的とした景観要素を選択した裏づけとしての政策や意思決定を明らかにする。

こうした検討を通して、世界遺産の選定や保護・管理に関わるユネスコや環境省などの基準や意図をどこまで取り込んでいるか、あ

るいはそれらとは異なる独自の判断や価値観によるものがどの程度介在しているか追究する。なお、ここでは、諸種の活動を行った当事者の実践面を重視し、たとえば UNESCO や環境省の意向や価値づけを前提とした回答・語りと、実際の活動としての実践がどこまで一致しているか、またはズレているか配慮し明らかにする。

このような調査研究を踏まえ、最終的に個々人が景観の何をどう価値づけ、いかに働きかけ活用しようとしているのか、またそうした価値づけ、働きかけ、活用などが、どのような政策や意思決定あるいは判断基準によって裏づけられているか追究する。

4. 研究成果

(1)2014 年度

2014 年度は、まず奄美群島では、国指定重要無形民俗文化財である「ショチヨガマ」と「平瀬マンカイ」を継承・開催している龍郷町秋名集落において、環境保全・文化財保護に関する地域住民の方々に聞き取り調査を行った。また鹿児島県立大島北高等学校において、同様なテーマで聞き取り調査を実施した高校生に対して、自らの取り組みに関する意識を聴取することができた。これらの調査によって、行政主導の景観保全の取り組みが、立場や世代を異にする現地住民の方々に、どのように受容され？いかなる影響を及ぼしているか？という問いを明らかにするための基礎的かつ重要な情報を得ることができた。

いっぽう、世界自然遺産である知床半島では、隣接する標津町・羅臼町・斜里町において景観保全にかかわる諸機関を訪問し、現地での取り組みについて担当者に聞き取り調査を行った。そこでは、特に地元住民の方々が関与する活動の有無を確認するとともに、その活動の内容を確認した。こうした成果は、一枚岩に語られがちな地元住民の方々を、景観保全に対する経験の違いによってグループ化することが可能となった。こうして成果は、当該地域の地元住民の方々を対象とした聞き取り調査と参与観察を行うための貴重な基礎情報となった。

(2)2015 年度

2015 年度は、前(2014)年度の基礎情報を踏まえ、まず北海道東部に位置する標津町の「茶志骨」・「伊茶仁」・「川北」の三地域において、地域住民の方々に聞き取り調査を実施することができた。この調査では、まず住民の方々が自ら暮らす地の自然・歴史・文化に対して、どのような知識や認識あるいは価値づけを保持しているか把握することができた。その上で、隣接する世界自然遺産となった知床半島や同地におけるアイヌの人々の文化・歴史に対する意識を問うとともに、その結節点となるポー川自然史跡公園そのものや同公園での企画・取り組みなどに対する

意見なども収集することができた。

いっぽう、奄美群島では、行政機関や NPO などに従事する関係者の方々に対しインタビューを行い、世界遺産登録の取り組みが進むなかで当該地域の住民の方々々が現在どのような意見を持っているのか、またそれに対して各団体がどのような対応を取っているかなどの情報収集に努めた。くわえて、この調査では、トップダウン的に要請される世界遺産申請のための条件や価値づけに対する、行政から民間までの現地の各種団体の対応を把握することができた。

以上のような現地調査を基に、同年度は、次のような研究成果を公開・提示することができた。まず景観人類学をテーマにした一般書に、奄美群島における UNESCO 世界遺産申請運動にまつわるポリティックスと、それに対する現地からのオルタナティブな価値形成としての「奄美遺産」運動の取り組みの可能性を提起した。また先住民のパブリックアークオロジーをテーマとした国際シンポジウムにおいて、アイヌの人々の歴史や文化がエスニシティを超えて地域住民共有の文化資源となる可能性を秘めていることを、標津町のポー川自然史跡公園を中核とした各種の取り組みを事例として提起した。さらに標津町では、地域住民の方々を対象としたワークショップを開催し、調査成果の現地社会への還元を行うことができた。

(3)2016 年度

2016 年度は、まず北海道標津町の「古多糠」・「薫別」の 2 集落と千島歯舞諸島居住者連盟標津支部を対象として計 12 名の方々に聞き取り調査を実施した。この結果、同町では、過去 3 年間で 5 集落と一団体の合計 45 名の地域住民の方々々が有する景観にかかわる認識・知識を収集することができた。また前(2015)年度に引き続き、同年度も、学会報告やシンポジウムなどで報告に加え、標津町で地域住民の方々を対象としたワークショップを開催し地域社会への成果還元と意見交換を行った。これらの諸活動は、現地の新聞メディアに取り上げていただいたため地域社会に広く周知することができた。

いっぽう、鹿児島県の奄美群島でも、長年調査を行ってきた加計呂麻島で、地域住民の方々を対象としたワークショップを開催した。このワークショップは、鹿児島大学・奄美分室との共催であったため学術的に意義のあるものとなったが、それ以上に現地で景観保全活動や文化財活用を行われておられる方々と意見交換を行うことができた。なお奄美群島では、大島北部の「秋名」・「赤木名」の 2 地区と加計呂麻島において、現在までそれぞれ 40 名以上と 60 名以上の地域住民の方々に聞き取り調査を行い、景観認識や世界遺産化の是非に関するデータを収集することができた。これらの成果は、今後さまざまな媒体や手段で随時公開してゆく予定であ

るが、同年度は景観人類学をテーマとした一般学術書に成果論文を掲載した。また奄美群島でも、現地の新聞メディアに取り上げていただいたため幅広く活動を周知することができた。

以上のように、本年度を含め過去 3 年間で当初に計画した内容をほぼ実施することができ、上記のような研究成果を提起した。これらの成果は、景観を地域共有の文化資源として位置づけ、地域住民が主体となる保全・活用のあり方を追究するための、有効な視座を含むケーススタディとして一定の貢献を果たしうると評価している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

大西秀之、文化財ポリティックスとしての景観価値：奄美群島における世界遺産登録推進と現地の景観認識、『景観人類学：身体・政治・マテリアリティ』(時潮社)、査読有、2016、pp.96-102

大西秀之、世界遺産を生み出す地域の営み：「生きている遺産」としてのフィリピン・コルディリエラの棚田景観、『東北学』、査読無、04 号、2016、pp.116-133

大西秀之、ソビエト体制の崩壊と先住民の生計戦略：ナーナイ系住民の二集落における土地利用と生計戦略、『生態人類学会ニュースレター』、査読無、No.21、2015、pp.7-11、<http://ecoanth.main.jp/nl/21.pdf>

大西秀之、アムール川流域における先住民集落の景観史、『考古学研究』、査読有、61 巻 2 号、2014、pp.1-4

ONISHI, Hideyuki、The Formation of the Ainu Cultural Landscape: Landscape Shift in a Hunter-Gatherer Society in the Northern Part of the Japanese Archipelago., *Journal of World Prehistory*、査読有、27(3-4)、2014、pp.277-293、10.1007/s10963-014-9080-2

[学会発表](計 13 件)

大西秀之他、共有資源としての文化的景観の可能性：地域住民が創る標津の景観価値、インカレねむろ・大学等研究プロジェクト 2016 研究発表会、2016/12、中標津経済センター なかまっづ(北海道・中標津町)

大西秀之、北東アジア地域における多文化集団の接触・交流状況：北海道開拓の開発と政策によるアイヌ社会聖地の創造、パレオアジア文化史学第 1 回研究大会、2016/11、東

京大学（東京都）

大西秀之、モノに刻み込まれた帝政ロシアの植民地経営、日本シベリア学会第2回研究大会、2016/11、千葉大学（千葉県・千葉市）

ONISHI, Hideyuki、Two Different Ancestors of the Ainu People: Roles of the Satsumon Culture and the Okhotsk Culture in Ainu History、*WAC(World Archaeological Congress)-8 Kyoto*、2016/09、Doshisha University (Kyoto, Japan)

ONISHI, Hideyuki、Enforcement of Foraging Society on the Ainu、*WAC(World Archaeological Congress)-8 Kyoto*、2016/08、Doshisha University (Kyoto, Japan)

大西秀之(ONISHI, Hideyuki)、セッション1：日本の無形文化財（Session 1: Officially-designated intangible culture assets in Japan: Comment: Some Dimensions of Intangible Heritage in Japan）、国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における『オーセンティックな変更・変容』」（Authentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage）、2016/03、国立民族学博物館（大阪府・吹田市）

大西秀之(ONISHI, Hideyuki)、アイヌエコシステムの舞台裏：民族誌に描かれたアイヌ集落の生業戦略の再考（Socio-historical Backgrounds of the Ainu Ecosystem: Rethinking Ethnographic Studies of Subsistence Strategy in Ainu Villages）、東北大学東北アジア研究センター創設20周年記念式典国際シンポジウム：東北アジア地域研究の新たなパラダイム、2015/12、仙台国際センター（宮城県・仙台）

大西秀之(ONISHI, Hideyuki)、地域共有の文化資源としてのアイヌ文化史：根室標津を事例として（Ainu Cultural History as a Common Property for Local Communities in Hokkaido: Narratives and Activities relating to the Ainu Culture in Shibetsu）、地域社会へ与える考古学の影響：ポストコロニアル時代の考古学と先住民コミュニティ（The contribution of archaeology to local / indigenous communities）、2015/11、北海道大学学術交流会館講堂（北海道・札幌）

ONISHI, Hideyuki、Landscape Shift in the Indigenous Village by Communism as Modernization: A Case Study on Two Nanai Villages in Amur Region、*EAEH (Association for East Asian Environmental History) 2015: The Third Conference of East Asian Environmental History*、2015/10、Kagawa University (Takamatsu, Japan)

ONISHI, Hideyuki、Subsistence Activities of Indigenous People Before and After the Collapse of the Soviet Union: A Case Study of Two Nanai Villages in Amur Region、*CHAGS (Conference on Hunting and Gathering Societies) XI*、2015/09、University of Vienna (Vienna, Austria)

大西秀之、ソビエト体制の崩壊と先住民の適応戦略：ナーナイ系住民の二集落における土地利用と生計活動、第20回生態人類学会、2015/03、プラザホテル山麓荘大会議室（滋賀県・大津市）

ONISHI, Hideyuki、The views of local people as politics of cultural heritage: A study of the landscape cognition of local people in the Amami Islands、*AJJ (Anthropology of Japan in Japan) 2014 Autumn Meeting*、2014/11、Nanzan University (Nagoya, Japan)

ONISHI, Hideyuki、Collapse of the Soviet Landscape and Adaptation Strategies of the Indigenous People: Land Use and Livelihood Strategies in Two Nanai Villages、*IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) Inter-Congress 2014*、2014/05、International Conference Hall of Makuhari Messe (Chiba, Japan)

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大西 秀之 (ONISHI, Hideyuki)
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：60414033

(4) 研究協力者

中山 清美 (NAKAYAMA, Kiyomi)
奄美市立奄美博物館・館長 (当時)

小野 哲也 (ONO, Tetsuya)
標津町立ポー川史跡自然公園・学芸員